

# 納涼苦人手形繡稿



交樂座 四ッ橋

# 乍憚口上

盛暑の頃と相成申候處銚後の皆々様には愈々御健勝に遊ばされ大慶此事に奉存候。然る處當座は國粹藝術保護といふ皆々様の篤き御支援によつて日毎に盛況を續け居申候處此度は更に一座若手新進連中の熱烈なる研究心に御同情を賜り夏季特別興行と仕り夕蔭涼しき頃より開演仕り候事と相成り申候次第に御座候。就ては狂言の上にも種々選擇を加へ各自得意の持場を得て一層の奮勵努力いづれも様の御恩顧に酬ひ又人形淨瑠璃本來の使命に基き愈々郷土藝術の特長を發揮いたすべく候まゝ何卒新進連中の努力に對して此上の御聲援を賜り開場勿々より陸續御來場の程を偏に奉御願申上候。

昭和十四年七月八日

四ツ橋 文樂座 敬白

昭和十四年七月八日初日

毎日午後四時開演

・御觀覽料・

- 一等席 御一名 金二圓
- (一階座席三十錢上り)
- 二等席 御一名 金一圓
- 三等席 御一名 金五十錢
- (外に各等入場税一割)

一等御座席  
一等椅子席) は五日前より

前賣切符發賣致居候

- 前賣切符 專用電話 南⑤四七壹壹番
- 一般御用 電話 南⑤三〇三二番
- 南⑤三七八八番

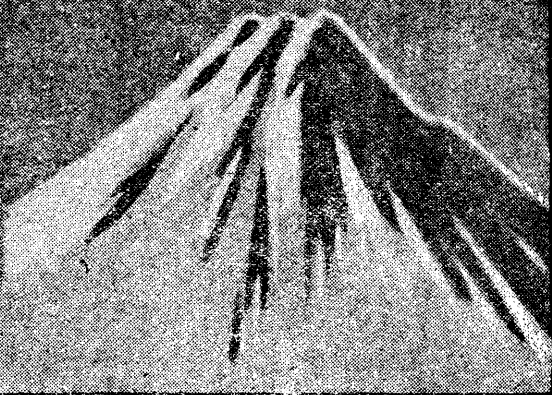
お草履の準備は御座みますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座みます。







國民精神總動員

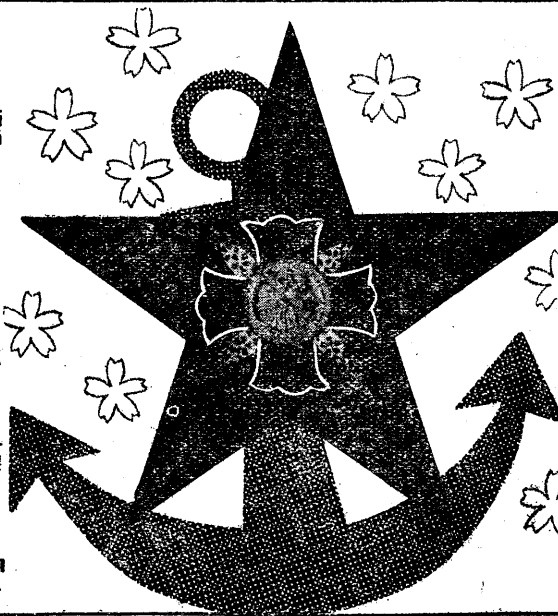


盡忠報國

舉國一致

堅忍持久

國を護つた傷兵護れ



傷兵保護院  
國民精神總動員中央聯盟

☆ 金を政府に賣りませう ☆  
銀行は又信託社会で ☆  
お取引次ぎ致しませう ☆



日初日八月七

幕開時四後午日毎



納涼若手人形淨瑠璃

かきね  
與右衛門  
色彩間苳豆

木下川堤の段

四時  
四時三十五分まで  
(幕間 十分)

いち  
一谷  
嫩軍記

熊谷櫻の段  
熊谷櫻の段  
熊谷櫻の段  
熊谷櫻の段

四時四十五分より  
六時三十五分まで  
(幕間 十五分)

ふたつ  
双蝶々  
曲輪日記

引窓の段  
橋本の段

六時五十分より  
八時四十五分まで  
(幕間 十分)

こひ  
戀女房  
染分手綱

重の井子別の段

八時五十五分より  
九時四十分まで  
(幕間 十分)

つり  
釣女

九時五十分より  
十時三十分まで  
(打出し)



かさね 與右衛門 色彩間苺豆

木下川堤の段

木下川堤の段

かさね 與右衛門

竹本辰太夫 竹本磨太夫 竹本松若太夫 竹本隅太夫 豊澤八郎造 野澤新太 豊澤廣彌 野澤吉太 竹澤團藏 豊澤廣彌

人形

かさね 桐竹紋十郎 與右衛門 吉田玉幸 取巻 桐竹紋太郎 取巻 吉田玉徳

(床本) 色彩間苺豆

へ思ひをも心も人に染ばこそ戀とゆ

「色彩間苺豆」は清元の所作として歌舞伎に度々上演される有名なもので筋は去年の初秋孟蘭盆に祐念和尚のお十念の時ふと契を交した腰元の累と今は百姓の與右衛門とは思ひつめて木下川堤へ心中の道行。すると不思議や流れに漂ふ骸骨に錆つく鎌それを見ると與右衛門の心に覺がある。累の爲には實の親、菊が夫の助を殺したその報ひで忽ち累の面相が醜く變る。與右衛門は又親の仇、これも前世の約束因果とあきらめて成佛せよと鎌を振りあげて累を殺す。

ふがほ夏草のきゆる間ぢかき末の露元の雫や世の中のおくれ先立つ二タ道をへおなじ思ひに跡先のへ別ちしどけも夏紅葉梢の雨やきめやらぬへ夢のうきよと行きなやむ男にてうどあを日傘ほねになるとも何のそのあとをあふせの女氣にこはい道さへやうへとたがひに忍ぶ野邊の草葉末の露か螢火もへもし追手かと身繕ひ心せきやもあとになし木下川堤につきにけり詞へコレかさね思ひがけない所へそなたはどうして來やつたぞ詞へどうしてとはどうよくな一緒に死なふとやくそくしておまへ一人かくごのかきおきこゝまでしたふて來たほどにともにくろして下さりませ詞へせつなる心はもつともなれどそなたの養父はあづかりの撫子の茶入れ紛失ゆえとのさまのおとがめうけそれさへあるにそなたと死んでは

親へのふかう思ひあきらめこゝから  
早うかへつてたも 〽いふかほつく  
〽うちまもりひよんな縁して此や  
うについかうなつた中ぢやゆえ〽も  
つたいない事ながら去年の初秋盂蘭  
盆に祐念さまのお十念そのときふつ  
と見染たが〽ほんに結ぶの神ならで  
佛の庭のにひまくらしよてから蓮の  
うてなぞと〽心でいはふぼだい心ご  
しやう大事のとのごじやと〽おくの  
つとめの長つぼね役者びみきの噂に  
もどこやら風が成田屋を〽おまへに  
よそへて楽しむ心おとしわすれに奥  
御殿うちまじりたるさわぎ唄〽入ぼ  
くろ〽きしやうせいしはほぐにも  
なるが五月六月はまんざらほぐにも  
なりやせまい〽うたふ辻占いまの身  
にあたりてわたしがはづかしとあと  
いひさして口ごもる 詞 〽ハテゼひに  
及ばぬ夫程迄に思ひ詰たるそなたの

心かあいや共にはらの伴まで此まゝ  
殺すも世の成行ふびんのものゝ心や  
な〽深き心をしらたまの露の命をわ  
れゆえに思へば便なきこゝろやと手  
を取交しなげきしがせめて義理ある  
親たちやうみのおやへもよそながら  
こよひかぎりのいとまごひ不孝のつ  
みは幾重にもおゆるしあれともろと  
もに川邊にしばしなきゐたる〽ふし  
ぎや流れにたゞよふどくろ助がこん  
ばくさびづく鎌 詞 〽俗名助 詞 エ、  
アイタ〽さては死りやうの 詞 アレ  
〽しばしあらそふ折からに風になが  
るゝトふしに〽夜やふけて誠に文  
はねやのとぎ筆のさやたく煙りさへ  
らちもなかずのしらむしのゝめ 詞 〽  
へ、もうしおまへはどこへ行かしや  
んすへ 詞 〽ヤ、そなたのかほは 詞 〽  
ナニわたしのかほが 詞 〽テモおそろ  
しい 詞 〽おそろしいはおまへのこゝ

ろその文見せて下さんせ 詞 サ此手紙  
は 詞 見せられまいがなエ、おまへは  
なア〽それそのやうによそほかにふ  
かいたのしみあればこそわたしをだ  
ましてどうよくな〽もしやにかゝる  
戀のよくとかくうき世がまゝにもの  
らば〽帯のやの字をまへだれに針う  
ちやめておとしばら〽駒下駄はいて  
あるひたらまことに〽うれしかろ  
ならぬ先迄おもふのも今さも身でみ  
がはづかしいむごいわいのと取りつ  
いてかはるすがたをつゆしらずいろ  
をふくみしとりなりはあはれにも又  
いちらしや 詞 〽道理〽死ぬるとい  
ふは皆いつはり國へきさんの此與右  
衛門足手まとひとおもへどもそなた  
をつれてこれよりすぐ 詞 〽そんな  
ら一緒に 詞 〽サアおじや 詞 〽アイ  
いそ〽先へたちまちにじやけんの  
やいば〽血汐のみち龍田の川の瀬



とかはる男の裾にしがみつき詞  
 リヤわたしをだまして詞  
 すのじやしさいといふはこれをみよ  
 鏡にうつせば詞  
 アレーコリヤま  
 アどうして此やうにわたしのかほが  
 かはりしは詞  
 コリヤかさねいんぐ  
 わの道理をよく聞け汝がためには  
 實の親きくが夫の助を殺したそのむ  
 くひめぐりてそのかほの變りは  
 てたに前世の約束此與右衛門は親の  
 敵是れも因果とあきらめて成佛せ  
 よと無二むざんうつてかゝれば身を  
 かはしへのふなさけなやうらめしや  
 身は煩惱のきづなにて懸路にまよひ  
 親々の仇なる人としらずして憎氣嫉  
 妬のくどきごとわれと我身にほれす  
 ぎし心のうちのおもてなやつらき心  
 は先の世のいかなるうらみかいまは  
 しとくどいつないつ身をかきむしり  
 人のむくひのあるものかなきものか

思ひしれやとすつくとたちへふり亂  
 したる黒髪は此世からなる鬼女の有  
 様つかみかゝれば與右衛門も鎌取  
 直して土橋の上へえりがみつかんで  
 一トえぐりなさけ用捨もなつの霜き  
 ゆる姿の八重撫子これやかさねの名  
 なるべしのちにつたへしものがたり  
 恐ろしかりける次第なり。



## 松竹家庭劇 三替の残

七月十二日初日

毎日ヒル正午二回開演  
 ヨル五時半

- 第一 職工と安樂椅子 二場
- 第二 眼 鏡 湯 三場
- 第三 エプロンの花嫁 四景
- 第四 寶の土用ぼし 二場
- 第五 怪談十三字の幽霊 二場

御料  
 四等席 五十錢  
 三等席 七十錢  
 二等席 一圓五十錢  
 一等椅子席 一圓  
 特等席 二圓  
 (お茶火共)  
 (他二各等入場統一圓)

どうとんぼり  
 中座



# 一谷嫩軍記

## 熊谷陣屋

### 熊谷櫻の段

中竹本源太夫  
鶴澤叶太郎

#### 人形

妻	相模	吉田文五郎
堤	軍次	吉田玉市
藤	の局	桐竹政龜
梶原平次	景高	吉田玉徳
石屋	彌陀六	吉田玉藏
軍	兵	大ぜい
百	姓	大ぜい

あります。

(床本) 熊谷櫻の段(中)

この淨瑠璃は寶曆元年十二月十一日  
初日の豊竹座に初演されたもので三  
段目の陣屋迄は並木宗輔の作でこの  
一の谷の三段目迄書て病歿しました  
この曲の内容を申し上げますと、一の  
谷合戦に行く熊谷次郎直實は堀川御  
所で義經に須磨の陣所の若木櫻に對  
して一枝を切らば一指を切るべしと  
いふ禁札を渡されました。それは義  
經は平家の公達の蕾の花をむぎ／＼  
散すなどいふ謎であります。須磨の  
浦で敦盛を組敷いた直實は我子の小  
次郎を身替りに立て、首討ち實檢に  
供へ自分は無情を悟つて剃髮して蓮  
生と名を改めて行脚に出る。忠と義  
親子恩愛の至情に涙流るゝ大名作で

行空もいつかはさへん須磨の月平家  
は八嶋の浪に漂ひ源氏は花の盛りを  
見る中に勝れて熊谷が陣所は須磨に  
一構要害巖しき逆茂木の中に若木の  
花盛り八重九重も及びなき夫かあら  
ぬか人ごとくに熊谷櫻といふぞかし花  
おらせじとの制札を讀で行人讀ぬ人  
一つ所に立集り扱も咲たり／＼花よ  
り見事な此制札辨慶殿の筆じやがな  
扱も見事一つも讀めぬヲ、あれはの  
義經様が此花を惜み一枝切らば指一  
本切べしとの法度書ヤア花のかはり  
に指きろとは首切下地ヲ、こはや見  
て居る中も虎の尾を踏む心地する皆  
ござれと花に嵐の臆病風ちり／＼に  
こそ別れ行、はる／＼と尋ねて愛へ  
熊谷が妻の相模は子を思ひ夫思ひの

旅姿陣屋の軒を爰やかしこと尋しが幕に覺への家の紋嬉しや爰と内に入折節家の子堤の軍次立出て是は〳〵奥様かヲ、軍次そなたも息災さふなマアめでたい〳〵熊谷殿や小次郎もかはる事はないか。早ふ逢たい逢せてたもハア旦那は今日御廟參り小次郎様は先頃より御前つとめで御下りなしマア〳〵長の御旅路お勞をお休めと挨拶とり〳〵なる所へ敦盛卿の御母藤の局虎口の難を遁れきてこけつ轉びつ花の影陣屋をめぐり走り付後より追手のかゝる者影を隠して賜はれとけはしき体に驚て相模は傍へ走寄見るに見かはす互の顔ヤアお前は藤のお局さまではないか、そふいやるそなたは相模じやないか、テモ久しやなつかしやお床し様やと手を取てマアこなたへと伴ひ入るしたしき体に心をきかし軍次は勝手へ入に

けり相模はやがて手をつかへ誠に一昔は夢と申す處大内に御遊遊ばす時勤番の武士佐竹次郎殿と馴れ初め御所を抜け出東へ下りお前様のお身の上を承はれば御懐胎のお身ながら平家の御家門參議經盛様方へ縁付賜ふとの噂其折は世盛りの平家御威勢はます〳〵と影ながら悦びましたに此度源平の戦ひ御一門もちり〳〵と聞に付ア、此藤の方様は何となされたどふ遊ばしたと一人苦にしておりましたにマア御機嫌なお願を見ておめでたやお嬉しや、ヲ、そなたも無事でマア嬉しい懐胎で出やつた時の子は娘ごぞか男かアノ息災で育つて居るかと一寸寄ても女同士問つ間はれつ年月に積る言の葉くり返し嬉し涙の種ぞかし藤の方涙ぐみ世の盛衰はぜひもなや其時に産落したは無官の太夫敦盛とて器量發明揃ふた子を今

度の軍に討死させ夫は八嶋の波に漂ひ我のみ残る憂難儀淺まし身の上当かこち賜へばヲ、お道理〳〵以前の御恩も有り連合にも語りお身の片付後世の營みお心任せに致しませふ以前は佐竹次郎と申て北面同然の武士只今にては武藏國の住人私の黨の旗頭熊谷次郎直實と人も知つた侍と聞より御臺はヤアそなたの連合の佐竹次郎今では熊谷次郎と言ふか、アイ、スリヤアノ熊谷次郎はそなたの夫よなハアはつと吐胸の氣をしづめ何と相模以前大内にて不義現はれ佐竹次郎と諸共に禁獄させよとの院宣自らが申宥め御所の御門を夜の内に落してやつたを覺へてかアツア其時の御恩何の忘れませふぞいなム、其恩を忘れずば助太刀してそちが夫熊谷を自らに討してたもエ、イそりや又何のお恨みでサア最前も咄した院



の御所のお胤無官の太夫敦盛をそちが夫熊谷が討たはいのエ、そりやマア誠でござりますかスリヤそなたは

なまくら親仁め汝れ何者に頼れ敦盛が石塔は建たやい平家は残らず西海へぼつ下し誂らゆべき相手なければ

來共石屋の親仁を無理やり引立奥へ連れてゆく。

何にもしらぬかサアはるん」と東より今來て今の物語聞てとむねの誠し

察するところ源氏方の二股武士が頼しに違ひは有まいサア眞直に白狀ひ

(床本) 物語りの段 (前)

からず追付夫が歸り次第様子を尋る

らげ偽ると鉛の熱湯脊骨を割て流し込とおどしかけても正直一遍テモ扱

奥へ連て行相模は障子押開き日も早西に傾ぶきしに夫の歸りの遅きよと

其間暫くお控へ下されと詞を盡し

も御無理な御詮議先ほども申た通り石塔の誂人は敦盛の幽靈五りんの

待つ間程なく熊谷次郎直實花の盛り

理を盡しなだむる折に表より梶原平

事は扱置一厘も手附は取ず建ると其儘石塔の喰逃げせめて人魂でも手附

の敦盛を討て無常を悟りしか遠に猛き武士も物の哀れを今ぞしる思ひを

次景高所用有て推參と呼はる聲ヤア

に取たら小提灯のかはりに致しませふに冥途へ書出しはやられず本の是

胸に立歸り妻の相模を尻目にかけて座に直れば軍次は臆て覆に成り先達

何梶原とや見付られてはお身の大事

がそんなしやうぼだい有様の申上願

て平次景高殿何か詮議の筋有とて御影の石屋を引連御出有り奥の一間に

まづくこちへと御臺の手を取一間

に取たら小提灯のかはりに致しませふに冥途へ書出しはやられず本の是

御待ちと委細を述べばムウ詮議とは

へ伴ひ入にける、程も有せず入來る

がそんなしやうぼだい有様の申上願

何事ならん先其方は一獻を催し梶原

梶原平次景高我意につる權柄顔挨拶もなく座に付ば堤の軍次立出今日

以此功德施一切此通りでございませ

殿を饗し申せサア早く行けくハテ

は主人直實志有て廟參り御用あら

と取じめなさア、何おつしやつても嫌に釘と軍次が詞に平次は惡智惠

扱何を猶豫すると叱りちらされぜひ

ば某に仰置かれ下されしと地に

大かた石塔を建させたわろも合點

なくも相模に顔を見合して心を殘し

鼻付くれば平次景高ナニ熊谷殿は他

く熊谷戻らば三つ鐵輪の詮議先そ

入にけり。後見送つて熊谷コリヤ女

所となソレ家來共其石屋の親仁め引

やつめを引立來れと一間へ入れば家

房わりや爰へ何しに來た。やい國元



き御對面と飛退敬ひ奉ればコリヤ熊谷軍の習ひとは言ひながら年はも行かぬ若武者をよふむごたらしう首討たなサア約束じや相模助太刀して夫を討せサ何とくと刀追取せり付け賜へばアイあいくと返事も胸にせまりながらエ、コレ直實殿敦盛様は院のお胤と知りながらどふ心得て討しやんした様子が有ふ其譯をと言もせつなきうろく涙ヤアおろか、此度の戦ひ敵と目ざすは平の宗盛夫に隨ふ平家の一門敦盛は扱置誰彼と鎧を削るに用捨がならふかイヤノウ藤の御方様戦場の儀は是非なしと御諦め下さるべし。が其日の軍のあらましと敦盛卿を討つたる次第物語らんと座をかまへ扱も去る六日の夜早東雲と明くる頃一二を争ひぬげけの平山熊谷討ち取れと切つて出たる平家の軍勢中に一際勝れし緋緘さし

もの平山あしらひ兼ね濱邊をさして逃出すハテ健氣なる若武者や逃る敵に目なかけそ熊谷是に控へたり返せ戻せヲ、イ、と扇を持つて打招けば駒の頭を立て直し波の打物二た打三打いでや組んと馬上ながらむんづと組兩馬が間にどふと落ちヤア、何と其若武者を組敷てかされば御顔をよく見奉ればかみ黒々と細眉に年はいざよふ我子の年ばい定めて二親ましまさん其歎きはいか斗りと子を持つつたる身の思ひの餘り上帯取つて引立塵打拂ひ早落賜へとすゝめさしやんしたかそんなら討ち奉るお心ではなかつたのヲ、サ早落ち賜へとすすむれどイヤ一旦敵に組しかれ何面目にながらへん早首取れよ熊谷ナニ首取れといふかいの健氣な事をいふたなふサア其仰せにいと猶涙はむねにせき上しまつ此通りに我子の小

次郎敵に組れて命や捨ん淺ましきは武士の習ひと太刀も抜きかねしに逃さつたる平山が後の山より聲高く熊谷こそ敦盛を組敷きながら助くるは二心に極りしと呼はる聲にハ、アゼひもなき次第かな仰せ置るゝ御事あらば言傳へ參らせんと申上れば御涙を浮べ賜ひ父は波濤へ趣き賜ひ心にかゝるは母人の御事きのふにかはる雲井の空定めなき世の中をいかゞ過き行賜ふらん未來の迷ひ是一つ熊谷頼むの御一言是非に及ばず御首をと咄す中より藤の局ナフ左程母をば思ふなら經盛殿の詞に付きなぞ都へは身を隠さず一の谷へは向ひしぞ健氣によらふた其時は母も俱々悦んですめてやりし可愛やな覺悟の上も今さらに胸もせまつて悲しやとくどき歎かせ賜ふにぞ御尤とは思へ共相模はわざと聲はげまし、イヤ申しお局



### 首實檢の段

後 竹本文字太夫

野澤喜代之助

人形

熊谷次郎	直實	吉田	榮三
妻相	模	吉田	文五郎
藤の局	桐竹	政龜	
源義經	桐竹	門造	
梶原平次	景高	吉田	玉徳
石屋彌陀六		吉田	玉藏

様御一門残らず八嶋の浦へ落行きたまふ中に一人踏とゞまり討死なされた敦盛さま數萬騎にすぐれた高名但し逃延身を隠し人の笑ひを受賜ふがお前の氣では嬉しいか御未練な御卑怯なと諫めに熊谷ヲ、出かいた〜コリヤ女房御臺所此所にござ有てはおためにならぬ片時も早く何方へも御供せよサア〜早く行け〜我も敦盛の御首實檢に備へんヤア〜軍次はおらぬか、早來れと呼はる聲と諸共に一間へこそは。

#### (床本) 首實檢の段 (後)

入相の鐘は無常の時をうつ陣屋〜の燈火にいとゞ悲しき藤の方ア、思ひ出せば不便や今はの際迄も肌身はなさず持つたるはコレ此青葉の笛我と我が身の石塔を建て貰ふた價にと渡して置いた此笛のわが手に入し

も親子の縁こんばく此世に有るならばなぜ母にはま見へぬぞ聞へぬ我子やなつかしの此笛やとはだに付け身にそへて盡せぬ思ひやるせなきコレ申し其笛がよい御篋おふたけ經陀羅尼より笛の音を手向るが直ぐにいせん敦盛様のお聲をば聞と思ふて遊ばせとすゝめに隨ひ藤の方なみだにしめす歌口もふるふて音をぞすましける。親子の縁の絆にや障子にうつるかげらふの姿は慥敦盛卿藤の局は一と目見るよりヤレなつかしの我子やとかけ寄り賜ふを相模は抱き留めア、コレ申し香の煙りに姿をあらはし實方は死で再び都へ歸りしも一念のなす所有るまい事にはあらね共いぶかしき障子のかげ殊に親子は一世と申せば御對面遊ばせば御姿は消失んイヤなふ四十九日が其の間たましい宇宙に迷ふと聞せめては逢て一と言をと振

放し〜障子ぐはらりと明け賜へば  
姿は見へず緋絨しの鎧ばかりぞ残り  
ける。ハツト計りに藤の方相模も俱  
に取り付いて扱は鎧のかげなるか戀  
しと迷ふ心からお姿と見へけるかと  
俱にこがれて正体も泣くどくこそ哀  
れなれ。時刻うつると次郎直實首桶  
携へ立出れば相模は夫の袂を控へコ  
レ申し是が親子御一生のお別れせめ  
て御首に成り共御暇乞と願ふにぞ藤  
の局も涙ながらノウ熊谷そちも子の  
有る身でないか、野山の猛き獸さへ  
子を悲しまぬはなきものを親の思ひ  
を辨へて情に一と目見せてたもとす  
がり歎かせ賜へ共イヤ實檢に備へぬ  
中は内に見んは叶はぬとはね退突退  
け行く所にヤア〜熊谷暫し〜敦  
盛の首持參に及ばず義經是にて見や  
うずるはと一と間をさつと押しひら  
き立出賜ふ御大將ハ、ハ、はつと次

郎直實思ひ寄らねば女房も藤の局も  
諸共にあきれながらに平伏す、義經  
席に着賜ひヤア直實首實檢延引とい  
ひ軍中にて暇を願ふ汝が心底いぶか  
しく密に來りて最前より始終の様子  
は奥にて聞く急ぎ敦盛の首實檢せん  
と仰を聞くより熊谷ははつと答走り  
出、若木の櫻に立おきし制札引抜き  
恐れなく義經の御前にさし置、さい  
つころ堀川の御所にて六彌太には忠  
度の陣所へ向へと花に短尺、又此熊  
谷には敦盛の首取れよとて辨慶執筆  
の此制札、即ち札の面の如く御説に  
任せ敦盛の首討ち取たり御實檢下さ  
るべしと蓋を取れば、ヤア其首はと  
かけ寄る女房引き寄せて息の根留御  
臺は我子と心も空立寄り賜へば首を  
覆ひ、コレ申し實檢に備へし後はお  
目にかけるこの首、イヤサコレお騒  
ぎ有るなと熊谷がいさめに追はした

なふ寄るもよられず悲しきのち々に  
碎くる物おもひ、次郎直實謹んで敦  
盛卿は院の御胤此花江南の所無は即  
ち南面の嫩一枝を切らば一指を切る  
べし花によそへし制札の面察し申て  
討たる此首御賢慮に叶ひしか但し直  
實誤りしか御批判いかにと言上す義  
經欣然と實檢まし〜ホ、花を憎む  
義經が心を察シアよくも討たりな敦  
盛に紛れなき其首ソレ由縁の人も有  
るべし見せて名残を惜ませよと仰を  
聞よりコリヤ女房敦盛の御首ソレ藤  
の方へお目にかけてよアイあいとばか  
り女房はあへなき首を手に取上見る  
もなみだにふさがりてかはる我子の  
死顔に胸はせき上身もふるはれ持つ  
たるくびのゆるぐのをうなづく様に  
思はれて門出のときにふり返りにつ  
と笑ふた面ざしが有ると思へば可愛  
さ不便さ聲さへのどにつまらせて申

し藤の方様御歎き有た敦盛様の此首  
 ヤア是はサイナア申しこれよふ御覽  
 遊ばしてお恨みはらしよい首じやと  
 譽ておやりなされて下さりませ申し  
 此首はな私がおやかたで熊谷殿と忍  
 び逢ひ懐胎ながら東へ下り産落した  
 はナコレ此敦盛様其節お前も御懐胎  
 誕生有りし其お子が無官の太夫様兩  
 方ながらおなかに持國を隔て十六年  
 音信不通の主従がお役に立たも因縁  
 かやせめて最期は潔ふ死なされたか  
 と恨しげに問ど夫は隣きもせん方涙  
 御前を恐れ餘所に言ひなす詞さへ泣  
 音血をはく思ひなり藤の局は御聲く  
 もりナフ相模今の今迄我子ぞと思ひ  
 の外な熊谷の情そなたは嘸や悲しか  
 る斯した事とは露しらず敵を取ふの  
 切ふのと言た詞が恥しい我子の爲に  
 は今の親コレく忝いと手を合せ  
 是に付けてもいぶかしきは此濱の石

塔敦盛の幽霊が建させたとの噂と言  
 ひ秘藏せし青葉の笛石屋の娘が貰ひ  
 して我手に入最前其笛吹いた時あ  
 の障子にうつりし影は慥に我子と思  
 ひしが詞もかはさず消失しはアイヤ  
 其笛の音を聞てかけ出し敦盛の幽霊  
 人目有りと引きとゞめ障子越しの面  
 影は義經が志しと聞て御臺は我子の  
 無事悟ながらも箒木の有とは見へて  
 隔てられ又も涙にくれ賜ふ折ふし風  
 にさそはれて耳を突抜螺貝の音かま  
 びすく聞ゆれば義經は勇み立ちチャア  
 く熊谷着到しらせの螺の音出陣の  
 用意くと仰に直實畏まり急ぎ一と  
 間へ入にけり。最前より様子聞居る  
 梶原平次一間の内より躍り出で斯あ  
 らんと思ひし故石屋めを詮議に事寄  
 せ窺ふ所義經熊谷心を合せ敦盛を助  
 けし段々鎌倉へ注進と言捨かけ出す  
 後よりはつしと打たる手裏劍は骨を

貫く鋼鐵はねの石鑿うんと斗りに息絶る  
 スハ何者といふ中に立出る石屋の親  
 仁ハ、アお前方の邪魔になるこつば  
 を捨てて上げました。扱幽霊の御講  
 釋承つて先づ安堵もふお暇と出行を  
 ヤア待て親仁コリヤ彌平兵衛宗清ま  
 てと義經の詞に恟りはつと思へどそ  
 しらぬ顔ハレヤレマとつけもない御  
 影の里に隠れない白毛のみだ六と  
 いふへ、ン男でえすハ、ハ、ハ、誠  
 や諺にも至つて憎いと悲しいと嬉し  
 いとの此三つは人間一生忘れずとい  
 ふ其昔母常磐の懐に抱かれ伏見の  
 里にて雪にこゝへしを汝が情を以て  
 親子四人が助かりし嬉しき其時は我  
 れ三歳なれ共面影は目先に残り見覺  
 有り眉間のほくらナコリヤ隠しても  
 サ隠されまじ重盛卒去の後は行方知  
 れずと聞しがハテ堅固で居たな満足  
 やと聞より彌陀六づかくと立寄り



義經の顔穴の明る程打眺めテモ恐しい眼力じゃよな。老子は生れながらにさとく莊子は三ツにして人相をみると聞しがかく彌平兵衛宗清と見られた上はエ、義經殿、其時こなたを見遁さずば今平家の楯籠る鐵拐が峰鴨越を攻落す大將はサ有るまいも又池殿と言ひ合はせ頼朝を助けずば平家は今に榮んものエ、宗清が一生の不覺是に付けても小松殿御臨終の折から平家の運命末危し汝武門を遁れ身をかくし一門の後弔へと唐土育王山へ祠堂金と偽はり參千兩の黄金と忘れがたみの姫君一人預り御影の里へ身退き平家の一門先立ち賜ふ御方々の石碑播州一國那智高野近國他國に建置し施主の知れぬ石塔は皆コレ彌平兵衛宗清が涙の種と御存じ知らずや今度敦盛の石塔眺に見へし時も御幼少にて御別れ申せし故御顔

は見覚えね共心得ぬ風俗はイヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思ふより心よく受合ひしが扱は命にかはりし小次郎がぼだいの爲此濱の石塔は敦盛の志しにて有けるか、へツエいかに天命歸すればとて我助けし頼朝義經この兩人の軍配にて平家の一門御公達一時に亡ぶるとはハア、是非もなき運命やな平家の爲に獅子身中の虫とは我が事さぞ御一門陪臣の魂魄我を恨みん淺ましやと或は悔み或は怒り涙は瀧をあらそへり元來もとよりさとき大將義經ヤア、熊谷障子の内の鎧櫃ソレこなたへはつと答へて次郎直實出陣の出立ちと好む所の大あらめ鍬形の兜を着しか、へ出たる鎧櫃御目通りに直し置コリヤ親仁其方が大切に育る娘へ此鎧櫃届けてくれよコリヤみだ六ヤアみだ六とはフウ宗清なれば平家の餘類源氏の大將が頼

むべき筋はム、面白のみだ六め頼れて進ぜましよしたが娘へは不相應な下されものマア内は何でござります改めて見ませふと蓋押し明くれば敦盛卿ノウなつかしやと藤の方かけ寄り賜へば蓋びつしやりイヤ、此内には何にもない、マ何にもないぞハア是でちつと虫が納つたイヤナフ直實貴殿への御禮はコレ、この制札一枝を切らば一子を切てへツエ忝いといふに相模は夫に向ひ我子の死んだも忠義と聞けばもふ諦めて居ながらも源平と別れし中どふしてまあ敦盛様と小次郎を取かへやうかハテ最前も咄した通り手負と偽り無理に小脇にひつ挟み連歸つたが敦盛卿、又平山を追つかけたを呼かへして首討つたのが小次郎さ知れた事をと鋭なる咄しに相模はむせび入エ、胴慾な熊谷殿こなた一人

の子かいのふ逢はふく／＼とたのしんで百里二百里來たものをつくりと譯も言はず首討たのが小次郎さ、しれた事をと没義道に叱る斗りが手柄ござんすまいと聲を上げ泣くどくこそ道理なれ心を波で御大將勇みを付けん／＼とヤア／＼熊谷西國出陣時移る用意いかにと仰に直實恐れながら先達で願ひ上し暇の一件、かくの通りと兜を取れば切拂ふたる有髮の僧義經も感心有りホ、さも有なんソレ武士の高名譽を望むも子孫に傳へん家の面目其傳ふべき子を先き立て軍にでも立ん望みはホウ尤コリヤ熊谷願ひに任せ暇を得さするぞよ、汝堅固に出家をとげ父義朝や母常磐の回向を頼むとしたしき御説ハ、ア有りがたしと立上がり上帯を引ほどき鎧をぬげば袈裟白無垢、相模是はと取付をヤア何驚く女房、大將の御情けに

て軍半に願ひの通り御いとまを賜はりし我本懐熊谷が向ふは西方彌陀の國粹の小次郎が抜がけしたる九品蓮臺一つ蓮の縁を結び今より我名も蓮生と改めん、一念彌陀佛、即滅無量罪、十六年も一昔、ア、夢であつたなど、ほろりとこぼす涙の露、柁に置く初雪の日影にとける風情なり長居は無益とみだ六は鎧櫃にれんじやくをかけた思案のしめく／＼り、コレ／＼義經殿もし又敦盛いき返り平家の殘黨狩集め恩を仇にてかへさばいかにヲ、それこそは義經や兄頼朝が助かりに怨を報ひし其如く天運次第うらみを請ん、げに其時は此熊谷浮世を捨てて不隨者と源平兩家に由縁はなし互ひに争ふ修羅道の苦患を助ける回向の役、ヲ、サ此みだ六は折を得て又宗清と心の還俗我は心も墨染に黒谷の法然を師と頼みおし

へを請けんいざさらば、君にもます／＼御安泰おいとま申すと夫婦連、石屋は藤のおつばねを伴ひ出る陣屋の軒、御縁が有らばと女子同士命が有らばと男同士、堅固でくらせの御上意にハ、ハ、ハ、有がた涙名残りの涙、又思ひ出す小次郎が首を手づから御大將此須磨寺に取おさめ末世末代敦盛と其名はくちぬ黄金札、武藏坊が制札も花をおしめどはなよりも惜む子を捨武士を捨、住どころさへ定めなき有爲轉變の世の中やと互ひに見合す顔と顔さらば／＼おさらばの聲も涙にかきくもり、別れてこそは出て行く。



双蝶々曲輪日記

引窓の段

橋本の段

引窓の段

切 竹本大隅太夫  
豊澤廣 助

人形

與兵衛の母 桐竹政龜  
女房 お 早 吉田小兵吉  
南方十次兵衛 吉田玉藏  
平岡丹平 吉田玉市  
三原傳造 桐竹紋太郎  
濡髪長五郎 吉田玉幸

(床本) 引窓の段 (切)

唄 出で入るや月弓の、八幡山崎南與

兵衛のお祖母、我が子可愛かな金を出せさと諷ひしを、思ひ合はせば其の昔、八幡近在隠れなき、郷代官の家筋も、今は妻のみ生き残り、神と佛を友にして、秋の半ばの放生會夜宮祭と待宵と、掛け荷うたる供へもの、母は神棚設へば嫁は、小芋を月代へ、子種類みの米圍子、月の數程持ち出づる、コレ嫁女月見の芋は明日の晩、今日は待宵、殊に日の内からは早い。是はしたり、お前が明日の放生會を、今日からお供へ遊ばす故、何にもかも宵日からする事とオ、笑止、コレ其オ、笑止はやつぱり廊の詞、大阪の新町で、都というた時とは違ふ、今では南與兵衛が女房のおはや、近所の人が來たと煙草吸ひ付けて出しゃんなや今でこそ零落れたれ、前は南方十次兵衛といふて、人も羨む身代、連合がお果て

なされてから、與兵衛が放埒、御代官の役目も揚り、内證も仕縫れ此方の手前も恥かしい事だらけ、さりながら此の所の殿様もお代りなされ、新代官は皆揚り、古代官の筋目をお尋ねにて與兵衛も俄のお召し昔に歸るは此の時と雑行なれども神いさめの供物、蚤の息が天とやらお上の首尾が開きたいの。イヤモウ夫れはお氣遣ひ遊ばすな。お前の其のお心が通じて、御出世でござりましょ早う吉左右聞けましたや。と待ち兼ね見やる表の方、編笠にて顔隠し、世を忍ぶ身の跡や先、見廻し立ち寄る門の口、嬉しや爰じやとずつと入る。母は見るとよりヤア長五郎か、母者人濡髪さんか、都殿ははしたり扱は願ひの通り與兵衛殿と夫婦に成つてかマア悦んで下さんせ私を請出し權九郎は根が贖金師で牢へ入り、殺され

た替間は、盗人の上前取で、追剝になつて殺し徳、何の氣懸りなう添うてみやんす。ハテ仕合な事、同じ人を殺しても、運のよいのと悪いのとハテ仕合な事ぢやの。イヤコレおはや、染々とした話ぢやが、其方衆は近付か。アイ曲輪でのお近付、あの與兵衛もか、イヤ是れはつい一目知る人ぢやが、又長五郎様がお前を母様と仰しやる譯はえ。オ、不思議なは道理道理どうで一度はいはねばならぬ。此の長五郎は五つの時養子に遣つて私は此の家へ嫁入。與兵衛は先妻の子で、私とはなさぬ仲故に、其の譯知つても知らぬ顔、あそこや爰の手前を思ひ、かつぶつ音信もせあなたが去年開帳參に不圖大阪で見付け、年たけても父御の譲りの高頬の黒悲若し其方は長右衛門殿へ遣つた、長五郎ではないかと、問うつ問

はれつ昔語。養子の親達も死に失せ相撲取に成つた話、歸つて與兵衛に話さうかと思つたれど、以前を慕ひ尋ねても往たかと、思はれるが恥かしさに隠してはゐたが、斯う白けて來たからは、戻られたら引合はし、兄弟の杯、おはずからず嫁共に子三人、私程果報な身の上は、又と世界に有るまい、と、悦ぶ親の心根を思ひ遣る程長五郎、明日をも知れぬ我が命と、知られぬ母の痛はしやと思へば堰き來る涙を隠し、イヤ申し母者人、與兵衛殿がお歸り有らうと拙者が事お話御無用。なぜ、イヤ相撲取と申す者は、人を投げたり放つたり喧嘩同然、勝負の遺恨によつて、侍でも町人でも、切つて切り捲り、撲ち放して、マアそんな事私は致しませぬど、男をたて過して一家一門へ難儀の罹る事も有る物

まあ此の商賣仕舞ふまでは、お前ともあかの他人、伴持つたと思召して下さるな、何時知れぬ身の上はお別れにならうもしれず、おはや殿、與兵衛殿へも母の事頼みまするといふて下され、長崎の相撲に下りますれば、永うお目に掛りますまい、随分御息災でお暮しと打蕨るれば、ヤレそんな商賣せいで叶はぬか、長崎へも何處にも往かず、此の内にて與兵衛と共に問ひ談合、其の格朴では何さしたとて仕兼ねはせまい、ナウおはや、さうでござりますとも、御兄弟といふ事、主も聞かれましたら悦ばれましよ、マアお茶漬でもなお袋様、否々初めて来た物鱈でもしませう、あの體は牛蒡の太煮鰯の料理が好きである、氣が晴れてよい二階座敷、淀川を見て肴にして一つ呑みや、うじくせずと往きやいの、

どりや拵よと、組や薄刀の鏞は身より出で、死出の立の料理ぞと、思へばいと胸塞がり申し何にもお構ひなくとも、缺碗で一杯限、ついたてで歸りましよ、と母の手盛を牢扶持と思ひ諦め煙草盆、提げて二階へ萎れゆく。人の出世は時知れず見出しに預り南與兵衛、衣類大小申し請け、伴ふ武士は何者か、所目馴れぬ血氣の兩人家來も其の身も立ち止り、是れが貴公の御宿所とな、イザ御案内、お先へと互に辭儀合、南與兵衛いそくとして内へ入り、母者人女房、只今歸つた、ヤアお歸りか戻りやつたか、お上の首尾は如何ぢやのくお悦びなされ極上々、マア嬉しい、即ち此の如く衣類大小下し置かれ名も十次兵衛と親の名に改め下され、昔の通り庄屋代官を仰せ仰けられ、七ヶ村の支配、ヤレく

夫れは目出たい事見れば表にお歴々が見えるがあまりや何様ぞ、あれは西國方のお侍密々に仰せ合はさるゝ事有て御同道、さして隠す程の事ではなけれど、暫く母人も御遠慮、女房も用事あるまで差控へよ、と云ひ渡し、表へ出づれば嫁姑、今からは武士附合、遠慮が多いと物馴れし、母と嫁とは立ち別れ奥と口とへ入りにけり。イザお通りと兩人の、武士を上座へ押直し、今日殿の御前にて仰せ付けられし竊かの御用、仔細は各々方に承れとの儀先づ其のお尋ね者の科の様子、お物語、と尋ねれば、年長なる侍取敢へず拙者は平岡丹平是れなるは三原傳藏と申して、主人の名はお上にも御存じ、當春大阪表にて、兩人の同苗共を殺され方々と詮議致せど、討つたる相手方知れず、此の間承はれば此の八幡近在に

由縁あつて立ち越えたと申す。さるによつて當役所へお頼み申せしに兄弟の敵隨分見付け召捕られよ、しかし夜に入つては當地不案内、所に馴れたる者に申し付け、繩かけ渡さんと有つて貴殿へ仰せ付けられた、仔細と申すは斯くの通りと、語るを一間に母親が、耳欝てれば此方には、女房おはやが立開きの蟲が知らずか胸騒ぎ、與兵衛は何の心も付かず然らば敵討同然隱密々々、若し左様の儀も有らうかと、母女房まで退け、御内意を承る、なんと、其の討たれさつしやつた、御同名のお名は、身が弟は郷左衛門手前が兄は有右衛門アノ平岡郷左衛門三原有右衛門トナいかにも、フムウ、御存じかな、イヤ承つた様にも、ムウ、して其殺した者は何者、サア其の相手は相撲仲間

で母親障子をびつしやり、おはやは運ぶ茶碗をぐわつたり、ハテ不調法など、叱る夫の側に座し、猶も様子を聞きゐたる、シテ御兩所は何國を目當、先此の丹平は當所を家捜し致したい、御尤も、傳藏殿には思召し寄りは何と、手前が存ずるには最前其許へお頼み申した繪姿を村々へくばり置き、油斷の體に見せ、どかくと踏込み牛部屋柴部屋、或は二階などを吟味致したい、夫れは尤もア、大きな體、下家にはをりますまい、兎に角二階が心元ない、先づ御兩所は楠葉橋本の邊を御詮議なされ夜に入らば拙者が受取り、假令相撲取でござらうが、柔術取でござらうが、見付け次第に繩打つてお渡し申さん其の段をすとも、ヤレ其の詞を聞いて安堵々々、イヤ丹平殿楠葉邊へ參らうかい様日の内は随分我々

働き、夜に入つてお頼み申すが肝心早お暇然らば又晩程役所にて御意得ませう左様左様と目禮し、二人の武士は立ち歸る。おはやは始終物案じ差俯向いてゐたりしが申し與兵衛様味なことを頼まれなされ、長五郎とやらを捕つて出すとの請合は、夫りやマアお前ほんの氣かえハテ氣疎いものはいひやう、あの侍に由縁もなく、元より長五郎に興味もなければ、いまの兩人が願ひによつて、お上より此の與兵衛に仰せ付けられた、其の仔細は、關口流の一手も覺えをる事お聞き及びあつて、役人共に申し付くる筈なれども、當所へ來て間もなく不案内、住み馴れた其方に申し付くる、日の内はあの方より詮議せん、夜に入つては、此方より隅々まで詮議し、なにとぞ搦め捕つて渡せ國の譽と有つてのお頼み、一生の外



分、召捕つて手柄の程を見せたらば  
母人にも嘸お悦び、イヤ〜、  
何の夫れがお嬉しかるうぞハテ昔は  
ともあれ、昨日今日まで八幡の町の  
町人、生兵法大疵の基と、ひよつと  
お怪我でもなされた時は、お袋様の  
悲しみ何のお悦びでござんせう、イ  
ヤいらざる女のさし出わりや手柄の  
先を折るかハテ折るも一つはお前の  
爲、ヤア此奴が何で濡髪をかばひだ  
て、但しはおのれが一門か何にもせ  
よ御前で請合ひ、見出しに逢うた此  
の與兵衛今までとは違ふ、詞返さば  
手は見せぬときつば廻せばヤレ夫婦  
の争ひ必ず無用と、母は一問を立出  
で最前からの様子、残らずあれにて  
聞きました。何と其の濡髪長五郎と  
いふ者、其方能う見知つてか、一度  
堀江の相撲で見受け其の後色里にて  
一寸の出合、隠れもない大前髪、慥

か右の高頬に黒痣、見知らぬ者も有  
らうと有つて、村々へ配る人相書、  
コレ御覽なされと懐中より、出して  
見せたる姿繪を、どれと見る母二階  
より、覗く長五郎手洗鉢水に姿がう  
つると知らず目はやき與兵衛が水鏡  
屹度見付けて見上ぐるを、敏きおは  
やが引窓びつしやり内は眞夜と成り  
にける、ヤアこりや何とする女房ハ  
テ雨もぼろつく、最早日の暮、燈を  
點して上ませう、ムウはてなあ、面  
白い〜、日が暮れたれば此の與兵  
衛が役、忍びをるお尋ね者、イデ召  
捕らんとすつくと立ち、夫れまだ日  
が高いと引窓ぐわらり、明けてはい  
れぬ女房の、心遣ひぞせつなけれ。  
母は手箱に嗜みし、銀一包取り出し  
是れはコレ御坊へ差上げ永代經を讀  
んで貰ひ未來を助からうと思ふ大切  
な銀なれども、手放す心を推量して

何と其の繪姿、私に賣つて給らぬか  
ムウ母者人二十年以前に御賀子を、  
大阪へ養子に遣はされたと聞いたが  
何と其の御子息は堅固でござるか與  
兵衛村々へ渡す其の繪姿、何卒買ひ  
たい、ハテ鳥の粟を拾ふ様に溜めて  
置かれた其の銀、佛へ上げる布施物  
を費しても、此繪姿がお買ひなされ  
たいか、未來は奈落へ沈むとも、今  
の思ひには替へられぬわいのヘツエ  
是非もなやと大小投げ出し兩腰差せ  
ば十次兵衛、丸腰なれば今まで通り  
の與兵衛、相變らず八幡の町人、商  
人の代物、お望みならば上ませう、  
あの賣つて下さるか夫れでは此方の  
ハイヤ日の内は私が役目ではござり  
ませぬハア、忝や、と戴く母、袖は  
變らぬ涙の海、嫁は見る目を押し拭  
ひ否申し與兵衛様、餘り母御様のお  
心根が痛はしさに、大事の手柄を支

へました無情い奴不届者とお叱りもあらうが産の子よりも大切に、可愛がつて下さる御恩、せめてはお力にと俱々に隠しました。常々からも萬事の品包むと思つて下さんすなど、中に立つ身の切なさを。言譯涙に時移り、哀れ敷そふ暮の鐘、隈なき月も待宵の光映ればイヤ夜に入れば村々を詮議する我が役目、河内へ越ゆる拔道は狐川を左に取り、右へ渡つて山越によもや夫れへは行くまいと夫れと知らして駆け出づる、情も厚き藪壘折から月の雲隠れ忍びて様子を窺ひる、堪へ兼ねたる長五郎二階より飛んで下り、表を指して駆け出すを、母は抱き止めコリヤ狼狽者何處へ行く、イヤ最前より尋常に繩掛らうと存じたれども、餘りと申せばお志の有り難さ、眼前歎きを見せませうよりは、此の家を離れてと

堪へに堪へてをりましたが、與兵衛殿の手前もあり、後より追付き捕られる覺悟、御放棄されて、と駆け出すを取つて引き据ゑ、ヤイ茲な物知らずめ、おれ許りか嫁の志、與兵衛の情まで無にしをるか罰當りめ、なきぬ仲の心を疑ひ、繪姿買はうと言ひ掛けたは、見遁してたもるか給らぬかと、胸の内を聞かう爲、賣つてくれた其の時の嬉しさ、おりや後影を拜んだわいやい、まだ其の上に河内へ越える拔道まで教へてくれた大恩を、何と報じようと思ひをるぞコリヤヤイ死ぬる許りが男ではないぞよ、七十近い親持つて喧嘩口論、人を殺すといふ様な、不幸な子供が世にあらうか、來ると其の儘缺椀に一膳盛と望んだはおのりや、牢へ入る覺悟ぢやな、夫れが如何見ておられうぞ、せめて親への孝行に、遁れ

るだけは遁れてくれ、生きられるだけは生きてたも、何の因果で科人に成つた事ぢや、とどうどふし、前後不覺に泣き叫ぶおはやも俱にせきのぼす、涙押へて、申し、泣いてご所ざるぢやないぞえ、夜が明くれば放生會で人立が多い、今宵の内に落す思案何卒姿を變へる仕様はあるまいかなオ、夫れも心付いて置きましたまあ目に立つ此の大前髪剃りおとしましたよドレ剃刀イヤ申し母人、姿を變へて繩掛らば、よく、命が惜しさにと、いはれるも無念な、侍を殺した場で、直に相果てうと存じました、死なれぬ義理にて生長へ一日々々と親の事が身に染み、ま一度お顔が拜みたさに、お暇乞に參つてかへつて思ひを掛けます、やは此の儘で與兵衛殿へ、お渡しなされて下さりませ、スリアどういうても

繩掛る氣ぢやな、覺悟致してをりま  
する、よいわ勝手にしをれ我より先  
にと剃刀を、ア、申し誤りました、  
サアそんなら剃つて落ちてくれと、  
母が手づから合砥に、かゝる思ひが  
あらうとは、神ならぬ身のしら髪  
此の身、剃るべき髪は剃りもせで祝  
うておとす前髪を、涙で揉んで剃り  
落す、老の拳の定まらず、わな／＼  
震うて刃先がきつくりア申し二所ま  
でお顔に疵が、ハアひよんな事しま  
した、幸ひ血止と硯の墨、べつたり  
つけて顔打眺め、大方是で人相が變  
つたが、肝心の見知りが高頬の黒痣  
剃り落さんと剃刀を、當て事は當な  
がら、是れこそは父御の譲り形見と  
思へば嫁女、私はうども剃り難い此  
方頼む剃り落して下され、私ぢやと  
て醜たらしう、夫れが何う剃らるゝ  
物お赦しなされて下さりませ、ア、

思へば思へば親の形見まで剃り落す  
様になつたか、エ、心からとはいひ  
ながら、可愛の物やと取り付いて、  
わつと計に泣き沈む、折もこそあれ  
門口より濡髪取つたと打ち付ける、  
かねの手裏剣高頬にびつしやり、は  
つと身構へ母は楯、おはやは燈火立  
ち覆ひ、今のは慥か連合の聲、長五  
郎さん顔の黒痣が潰れたぞえ、ヒヤ  
アぼんに眞に是れも情と母親は表を  
拜みゐたりしが、兼て覺悟の長五郎  
思ひ設けてどつかと座しサア母者人  
お前のお手で繩を掛け、與兵衛殿へ  
お渡しなされて下さりませ、コレ長  
五郎様お前は氣が逆上つたか、取つ  
たと顔へ打ち付けて黒痣を消した連  
合の心、又コレ此の打ち付けた銀の  
包に、路銀と書いた一筆其所にお心  
付かぬかえサア其の書付も、黒痣を  
消した心も、骨に徹へ肝に透り、餘

り過分忝さに母の歎きも御意見も、  
不幸の罪も思はれず、不具な子が可  
愛いと、義理も法も辨へなく、助け  
たい／＼と母人の御慈悲心、暫くは  
お心休みと詞に隨ひ、元服まで致し  
たれど、も一人ならず二人ならず、  
四人まで殺した科人、助かる筋はご  
ざりませぬ。怒イライラかな者の手に掛らう  
より、形見と思ひ母者人、泣かずと  
も、繩を掛け、與兵衛殿へ手渡し  
ようお禮を被仰れや、ヤ、コレこれ  
さうなうては此方、未來の十次兵衛  
殿へ立ちますまいがの、オ、誤つた  
長五郎、よういうてくれたな、いか  
様思へば私は大きな義理知らず、眞  
をいへば、我が子を捨てても、繼子  
に手柄さするが人間、畜生の皮被り  
猫の子を銜へ歩行く様に、隠し遂げ  
うとしたは何事、とても遁れぬ天の  
網、一世の縁の縛り繩、おはや其の



### 橋本の段

切豊竹駒太夫  
鶴澤清二郎

### 人形

嫁	おてる	桐竹紋太郎
下女	おまつ	吉田文二郎
橋本十右衛門		桐竹門造
傾城	あづま	吉田文五郎
駕	甚兵衛	吉田榮三
山崎與五郎		吉田文之助
駕	太助	吉田多三郎
山崎與次兵衛		吉田玉次郎

細引でも取て下され否夫れでは連合の心を無になさるゝと申す物唐天竺へござつても、此の世にさへござれば如何してなりと、又逢はれる、何かはなしに、落しまして下さんせいやなう一旦匿うたは恩愛、今又繩掛け渡すのはなさぬ仲の義理、晝は護ひ夜は繩掛け晝夜と分ける糺子本の子、慈悲も立ち義理も立つ、草葉の蔭の親々への言譯、覺悟はよいか待ち兼ねてをりますとおはやを取つて突き退け、手を廻すれば母親は幸ひあり合ふ窓の繩、追取つて小手縛り、突き放せば引く繩に、窓はふさがれ心も闇、くらき思ひの聲張り上げ、濡髪長五郎、召取つたぞ十次兵衛は居やらぬか、受取つて手柄にめされと呼ぶ聲に、與兵衛は駆け入りお手柄、左様なうては叶はぬ所、とても遁れぬ科人受取つて

御前へ引く、女房どももう何時、されば夜半になりましょか、たはけ者めが七つ半は最前聞いた、時刻が延びると役目が揚る繩先知れぬ、窓の引繩三尺残して切るが古例、目分量に是れからとすらりと抜いて縛繩、すつかり切ればぐわら、指し込む月に南無三寶夜が明けた身共が役は夜の内計り、明けたは即ち放生會、生けるを放す所の法、恩に被ずとも勝手においきやれ、ハ、はツと悦ぶ嫁姑、合はす兩手の數よりも、九つの鐘六つ聞いて残る三つは母への進上、拙者が命も御自分へ、夫れもいはずとさらば、さらばの暇乞。別れてこそは落ちて行く。

(床本) 橋本の段 (切)  
思ひなくて 藪入したき。 親里に。 與五郎が嫁お照。 去らるゝ

となく去るとなく呼戻されて明暮に  
辛氣のぶらぶら病さのみ床には  
つかねども。つれなき床も懐し

くよひよんな事。言損ひの出直  
しに、お薬上ぎよと立つて行く。

早仕舞や。旦那これに。太儀々々サ  
ア太夫どうせう。どうやらいふので  
あつたなう。それを私に何の談合奥

き。お氣の縫れを慰める下女が接  
摩も話伽。詞申し御寮人様。わたし

詞えい。え。ヲツト杖しよか  
い。てもしまな物ぢや。太助。二十  
六七貫あるかい。ヲ、あるとも

様も来てござりや。お逢ひなされて  
よいやうに。おつと合點。詞 甚兵衛  
は何處ぞに待たしておきや。我が身

や先日お隙貰ふて。京の芝居見まし  
たがな。江戸役者の中村七三。二の

且那が十四五貫、女中様が十二三貫  
の相輿。牧方から橋本まで。五百に

は此處を動きやんな。ぢやがおれは  
つゝと入るか。頼ませうといはうか  
と。くしやらむしやらも鬨高き舅の

替りの淺間が獄、見て參りましたが  
面白い事とござります。女形は花井

へたりをらうと持自慢。ついで行  
過ぐる門の口。詞 おつと爰ぢやぞ

を内を差覗き。詞むまし。晝寢は我等  
がお内儀様。幸ひ邊に人はなしと。

吾妻。奥州といふ太夫になつたよき  
それは七三が傾城買どうもいへ

下して貰ほ。辻駕籠は狭うて腰も首  
もむりいふ。ヤレしんどや

つかと入つて枕元。どしと  
と足音に。ふつと目覺めて見合

ぬ。あれなりやほんにどつちやから  
も。惚れる筈ぢやと思はれますで

歩行いて些と休まうと垂をひらりと  
コレ吾妻。詞かう二人乗つた形は

す顔。詞エ、與五郎様。ようお出で  
なさんした。何と思つて来ておくれ

ざりますと。餘所の噂も身にあた  
り。詞ムン其花井吾妻とやら。傾城

角にいの字で四角な長十郎。見立が  
きつか氣疎いかと、駈落しても口

もそんなお詞は。開始めの聞納め。  
詞ア、幸先の悪い事いふ人ぢや。舅

になるかや。ア、見たい事ぢやなう  
吾妻といふ名で太夫になれば。與五

へらぬ。面白病は一盛、橙にて  
や直るらん。太助は明駕籠振擔げ詞

殿はお留守か。イ、エ奥に御寢なつ

郎様の惚れてござる。藤屋の吾妻も  
同じ事。どの様にすれば殿達に思

はるのぢや私や見たいと。いとど

て。ム、寝てか。それで半分落着いた。マアお供には誰が来たえ。イ、ヤ誰も来ぬ連がある。お連はどなたぢやお入りと。挨拶ながら表の方。ちらと素振を見て取る廻氣。詞 與五郎様聞えませぬ。お氣に入らぬは私が科。幾日お宿にござらいでもどうと申した事はない。父様の堅い氣から。親與次兵衛に謝らさにや何程でも戻しやせぬと。いぬことならぬ私情氣でいなぬとお腹立ち。面當に吾妻殿連立つて来てこれ見よがし。私や近付になりませう。父様は何處で立つ。昨夕も讀んだ本の中情氣も少しは愛想ぢやと。書いてはあれど怪我な事思ひもせにや言ひませぬ。私ばかりか父様迄それ程お前は憎いかえ。お胴慾なと恨泣き傍で聞き入る夫より。洩れ聞く吾妻が切なきは。身も悔むより外ぞなき。詞 イヤさう

ぢやない有様に言を。おりや隠匿うて貰ひに來た。エ、父御様の御機嫌が惡うてかえ。イヤ親父は知らぬけれど。内へ往なれぬ譯は。彼所にゐるあの吾妻。請出さうといふ客があつて。どうも濟まぬによつて連立つて駈落。景清は牢破り吾妻は關破り内へはどうも連れては往なれず。誰を頼まう所もなし頼まう人は我が身ばかり。舅へ沙汰無しにして。こそと二人を隠匿うてたもらぬか。コレどうぢやいなう。サアそれも皆私が科、お氣に入る様に生れたら其御苦勞はさせませぬ。詞 エ、そんな所ぢやない。隠匿うなら隠匿うとちやつというてたもの。急く男には返事もなく、表へ出でて。吾妻が手を取り。忙しなれば染々とお近付の挨拶せぬ。是へ〜と連れて入り。詞 お前は私が身に代へて隠ひおはせ

隠し抜く與五郎様はお館へ早うお歸り遊ばせと。聞くに吾妻が不思議立て。詞 憎い奴ぢやとお叱りもないは賤しい此身とお育がら。それに不審はなけれども。與五郎様は隠匿うて私はならぬとありそな事。あちらこちらの仰しやり様。仇を情でお返し氣の毒がらせ足らぬのか。詞 いゝえいえ。つい一通りで殿御をば騙さるゝと思や腹も立と。關破りといふ事迄して。命に懸けて與五郎様を。思うて下さる吾妻様何の憎う思はうぞ。お二人ながら隠匿へば主に逢ひたいばつかりに傾城迄を引入れてと一途に堅い父様のお叱りは知れてある。見ず知らずでも頼まれて隠匿ぶが人の道。これは又深い縁。詞 忍ぶ身はお前ばかり與五郎様に科はないお館へお歸りあつても難儀のかゝる筋あるまい。吾妻様さうぢやないか



えと。おぼこなやうでも武家育ち立てぬく義理に恥入りて、顔を得上げぬばかりなり。與五郎は若氣の苦なし。詞コレお照。そんならば吾妻を頼む。おりやもう去ぬるぞや。どうでもさうせにやならぬかえどうやらそれでは。コレ。些との間ぢや大事ない。又逢ひに来るわいのコレとつくりと預けたぞや。お氣遣ひ遊ばすなしつかりと預つて。晩から私と二人寢て。廓の話もきゝやんしよ。イヤコレ。わが身の事をおりや何にも悪うはいやせなんだと。可笑しい尻へ手の廻る。帯引緊めて立出づる。詞

遠慮。娘出來いた。吾妻をばよく隠匿うた。サア與五郎。其方は又身が隠匿う。エイそんなら彼方も御一所に。サア隠匿ひやうこそ曰あれと。手に持つたる硯箱差出し。詞サア娘殿。娘照へ暇の狀。一通書いてくれめされ。エイ。いやさ驚く事はない氣に入らぬ女房を持つて貰ふ追從に隠匿つたとはいはれては。この橋本治郎右衛門人中へ面署が濟まぬ。他人になつて隠匿へば。治部も立つ。お身も安穩。肩の悪いは娘ばかり。なんとせう。是非々々書いておくりやれと退引させむ詞詰、はつと一度に三人が心々の當惑涙。詞ヤア娘。兼て言聞かせ置くに何泣く事。未練な奴めと叱る片手に硯箱。引寄せて墨磨りならし。詞書きやれ與五郎。但しは嫌か。縁切らずば潔白に。我が鞆がかくくくと代官所へ訴へやう

縁切つて隠匿はるゝか。縁切らずに訴へさするか。サアどうぢやくくと促立つる程とまくれて。返事なければコレ申し。詞我が事は大事なにお身さへ無事であるならば事濟む後にはどうなりと。お心休めにマア書いてと。いふもおろく差當る。訴人の嚇に詮方なく。遣りたい暇もやり難い義理も糸瓜も一つ書。お定の三件半手早に書いて差出すを。中から取つてお照様。詞こりや吾妻が預ります。私が見る前で渡さしては道立たず、というてお書きなされねば隠匿ふまいと仰しやるし。お書きなされた暇の狀。私が預りや事濟むと。縁の意氣づくそれ者とて。諸譯を立てし擲なり。折もあれ山崎與治兵衛我が子が爰に来てゐるとは。しら髮天窓のおつぼう髮供をも連れず相舅の。門口に頼みませ

う。詞 與次兵衛でござる。治郎殿に

御意得ませうといふ聲に。見付けられなと三人とも。奥に追遣り出迎ひ。詞 與治兵衛殿お入りと。何氣

なければ二人共奥へ入る風見て見ぬ風。見付けられてもさあらぬ風。

互に一物ある顔なり。詞 扱々打絶え御意得ませぬ。相變らずお達者さ

うで珍重。いやもう私が達者なより。息子殿の達者なにほうど困り

果てました。照は氣色がよござるか。イヤもう段々と心よう。物も喰

ひますか。たべるとも。そんなら連れて往にましょかい。イヤ先づ

今分では遣れませぬ。サアその遣られぬも大方合點。といふと事が難

かしい。身が迎ひに来るからは。ハテもう利潤といふものぢや。何かな

しに戻して貰ひたい。イヤ其許がお出で故。照めは猶え戻さぬ。與五郎

おこせといはしやるのか。いや與五郎が參られたらば。いよ。以て往

なされぬ。なせでえす。與五郎が本心から。照を戻せといひこさば

自身は愚か。丁稚小わらをおこすと

も違背なく戻すが道、臭い物に蓋すると押付業氣に入らぬ。イヤサさう

いはんしやんないの。嫁に取るからおれが娘。野良めが性根が直らさば

お照で跡を立てる所存皆迄いやんな我が子にまで金銀を惜み。命生害に

及ぶも構はぬやうな與次兵衛。人の子で跡立てると。好い加減な事おい

やんな望みにないぞ。ヲ、望みにな

い與五郎。なせ引込んでおきやる治部右。シヤいはして置けば詞が過ぎ

る。放埒の加擔人はせねど。傾城を請出し。妾でかけにせうとも誰が咎めぬ身上。僅の金に手支させ。義理の迫つた駈落。見捨てられぬ舞の難

儀。引込んだと言はるゝが面倒さに

縁切つて隠匿うた。ア、それも嗅いで来た。女郎を連れて走りをつたと

新町からの付答。今日も明日も明後日

日も醒果てたたわいなし。身上が氣遣で引込んで無理暇取り。養を取る

やうな舞をかへる思案ぢやの。黙れ

與次兵衛。大平の代に入らざる武具馬具賣代なしても。養はるゝ治部右

衛門ぢやないぞ。諸色を買込み値上げさせ。高利を食り人をひづめる。

むさい汚い人非人と。この治郎右衛門が性根は違ふぞ。イヤ人非人とは

誰が事。わごりよの事さ。然とさうか。諄い。諄くばかうぢやと、

せき詰めて。氣短脇差引抜いて打掛かるを鏝にて受け。詞 惡戯すなど勿飛ばす。猶苛立の滅多切り。互に開かぬ氣拔合せ。はつし。と切り結ぶ。中を押しわる息杖は始終殘



ひよんな物買合して。思ひも寄らぬ誤り。所拂に夫から散々。六つの年ぢや覺えまい。婢は一昨年死ぬるまで狀道に。お豊も今は藤屋の吾妻というて。新町で一といはるゝ太夫になつて。おとなしゆなつておますと聞くと其儘飛んで往て逢はうとは思うたがの、それから此さま。よう思へば結構な衣服着た女郎に。おらが様な雲助が親ぢやというたら。よい幸ひも落ちようかと遠慮は不沙汰よい客が附過ぎて。與五郎殿をようあんなうはくにしをつたなア。おのれが事で今が今。親父様達がすつての事に切つゝ拵つゝ。聞いてゐた此甚兵衛。衛ないと氣の毒なと悲しいと腹の立つと。何程も涙が止いで。昨日洗うた單物四文が糊を棒に振つたこりや誰から起つた事。長うはいはぬあの衆に。意見して思切らしませうと受合つた詞がある。久し振で逢うた親が始めての頼みぢや。聞分けて思切つてくれ。此方が思ひ切ると與次兵衛様も與五郎様も。次郎右衛門様もお照様も。皆えいわい。思切らぬとの。與五郎様の爲にもならず與次兵衛様と治郎衛門様は。先刻の通りえいやつとう。取分けてお照様は餘りでおいとしほい。縁といふ物はしよ事もないもの。今日牧方で鬪取りの錢指。長いのに當つたも思はず親子の縁の綱。乗せて來た駕籠の内吾妻と聞いてびつくり。ある縁はしよことがない。丁度それと同じ事今思切つたとて有る縁なら又逢はれる。何卒思切つて下されや。コレ頼みます。く。命も懸けてゐる中を思切つてくれというて親が頼む心はまあ。どんなものであらうと思ふ。思ひやつての願ひぢや。コレ聞分けてたも聞分けてと。吸り上げくわつとばかりに咽返る。駕籠が涙は息杖の、休む隙なき思ひなる。吾妻は涙押し拭ひ、今といふ今迄も父様ありとは聞きながら。お前を私が父様とも。知らぬ道筋。勿体なや。野邊の邊りの親の與子が昇くところ聞くものを。いかに知らぬといふとも現在親に駕籠舁かせ。乗つた私に神様や佛様が罰當てて。なぜに私を逆様に落して殺して。下されぬ。神や佛が怨めしい。又其上に與五郎様。退けと、仰しやる御意見も。無理とはさらく。思はねど。詞よう思うても見さしやんせお照様といふ奥様の。あるを知りつゝ逢つた客。始の勤め後の色女夫になろとも去らさうとも。微塵も思やせぬけれど。いやな客から請出すと儘ならぬ身は是非なくも。連れて退

ひよんな物買合して。思ひも寄らぬ誤り。所拂に夫から散々。六つの年ぢや覺えまい。婢は一昨年死ぬるまで狀道に。お豊も今は藤屋の吾妻というて。新町で一といはるゝ太夫になつて。おとなしゆなつておますと聞くと其儘飛んで往て逢はうとは思うたがの、それから此さま。よう思へば結構な衣服着た女郎に。おらが様な雲助が親ぢやというたら。よい幸ひも落ちようかと遠慮は不沙汰よい客が附過ぎて。與五郎殿をようあんなうはくにしをつたなア。おのれが事で今が今。親父様達がすつての事に切つゝ拵つゝ。聞いてゐた此甚兵衛。衛ないと氣の毒なと悲しいと腹の立つと。何程も涙が止いで。昨日洗うた單物四文が糊を棒に振つたこりや誰から起つた事。長うはいはぬあの衆に。意見して思切らしま

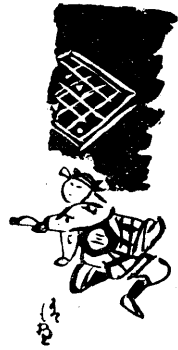
いたる與五郎様。輕いお身ならそもない。逢ひかゝるから、今迄も重なる節句年の暮。お世話になつた此吾妻。今又わしゆえ難儀のお身。任せぬ時に振捨てゝ。どうまあ義理が立つものぞ。コレ手を合して拜みます。エなあ申しコレなあと。親に取付き泣く娘。粹な育も涙には譯も隔もなかりけり。詞ヲツツさうぢや。さうなうては濟まぬところ。ぢやけれども其様に。此方も道理彼方も道理。道理ばかりいうてみればいつついけ同じ事。其道理を思ひ外し。與五郎様の爲ぢやと思つて。退いてくれ。よ。こりや。親が手を合す思切つてくれ。糸瓜とも思やせんか知らぬけれど。いひかゝつた親が頼み。聞かねばもう破れかぶれ。七生も八升も一斗迄の勘當ぢや。といふは嘘。や。えい人ぢや思切れ。

切れと、追詰られ。詞アイ切るか。アイ。切るか。アイ。切るか。アイ。切るか。の涙の隙。ありあふ刀抜くより早く。南無阿彌陀佛と取直すコリヤさせぬわ。詞こりや何する狼狽者と。持つたる刃物もぎ取ればわつと泣き。詞生きてゐる内は思切らうと思つても、どうも思切られぬ得切らぬ。思ひ切らねば一日の恩も送らぬ父様のお詞背いて勘當受ける是がまあ、どう生きてゐられうぞ。父様留めずに殺してと。又取る刀をどつこいと留めてもとまらず、いやと死ぬると競合ふ刀。中から取つたは治郎右衛門。詞細は詳しく皆聞いた。吾妻死ぬるに及ばぬと。地刀を鞘にとつくと納め。詞扱は甚兵衛親であつたか。いかさま様子あらんとは思ふた。其許が子を思ふも、此治郎が子を思ふも迷ふ

心は皆一つ。子ならで親は泣かぬ物を生れる時を悦びとは。何時の世からの偽ぞや。詞コレ此刀は五郎正宗金百枚の折紙。地頭より兼て御所望。身を離さぬ重寶なれども。賣代なして吾妻を身請。關破りの科はこの治郎右衛門がさつぱりと抜いた上與次兵衛に鬱憤いふ。ヲ、承らう治郎右殿と。奥から出づる與次兵衛が何時の間にやらごつそりと。頭圓めた法體姿。是はと皆々驚けば。詞アツア、治郎右殿。有様は今日来た心と息子めが關破る金でなけりや扱はれぬ。扱や直に親の手から請出してやるも同然。此方の手前言譯が濟まぬから。氣を搜つて先刻のしだら。金の惜しいも子の可愛さ。金の冥加に盡きる與五郎一文でも溜めて置きやア。一日なりと遅う乞食させうと思ひ。せはしたのが今では仇。







## 戀女房染分手綱

### 重の井子別の段

### 重の井子別の段

豊竹呂太夫  
鶴澤寛治郎  
竹本伊達太夫  
鶴澤友衛門

### 人形

乳母	重の井	桐竹紋十郎
馬方	三吉	桐竹紋司
調	姫	吉田文枝
本田彌惣左衛門		吉田小兵吉
こし元	お福	吉田玉男
宰	領	吉田多三郎
宰	領	吉田玉米

この淨瑠璃は寶曆元年二月竹本座に掛けられたのが始めて全十三段から成立つてゐます。この段は十段目で双六の段であるが重の井子別れで通つてゐます。作者は吉田冠子、三好松洛であります。この曲は大近松の「待夜小室節」(丹波與作)を改作したものであります。書下しの時は竹本大隅縁が語つてゐます。この子別の段の趣向は丹波の藩主由留木家の家老伊達與三兵衛の伴與作が竹村定之進の娘重の井と通じて與之助といふ子供を生んだが、悪者の讒言で故國を走り、馬追に零落します。重の井は再び主家へ歸參が叶ひ、乳人

となつて姫君のお供で江戸へ發足しやうとして、姫君のお遊びにと呼入れた馬士が意外にも一子の與之助であつたので、一旦は親子の名乗をしたが、世間體を恥ぢて、涙を隠して袂を別つといふ筋であります。歌舞伎にも上演されて有名なものです。

### (床本) 重の井子別れの段

君。かうおもしろい東とは、今迄おれは知らなんだ、サア〜行かう、早やいかう。ヤアござらうとおつしやるか、そりやめでたいわ〜、又もや御意の變らぬ間に、行列揃へと立ちきはぐ、お乳の人は勇みをなしそんならま一度、大殿様お袋様とお別盃これも、馬子殿おかげじや、でかした〜、そちには禮いふ、褒美やる、そこに待ちや〜とさどめき渡

り、奥にお供し入にけり、馬士はつひに見ぬ金の間をうそそと、覗き廻れど蓮の外、踏もならはぬ備後表詞エ、此座敷はぎやうにすべつて歩かれぬ、大名の家よりも、こつちの内がけつこうでござる、と獨言して居たりけり、お乳の人は大高に、菓子さま、文庫にもり入れ。詞どれどれ三吉、そこにかそちは健氣者じや道中双六お目にかけて、それ故に姫君様、お江戸へござると御意なさるゝお上にも御機嫌、是は御前のお菓子有難ういたゞきや、お錢三筋、買いたい物買や、殊にそちは通しじやげな、道中すがらも用あらば、お乳の人の重の井に逢はふと云や、見れば見るほどよい子ぢやに、馬士させる親の身は、よくくであらうといと懇ろの詞のすゑ三吉つくく聞きすまし。詞 由留木殿の御内お乳の人

の重の井様とはお前かそんなりやおれが母様と、抱き付けば。ア、こは慮外な。詞 俺が母様とは馬士の子は持たぬ、ともぎ放せば、武者ぶり付き引退くれば縄り付き。詞 何んのない事申しませう。わしが親はお前の昔の連合、此御家中にて番頭伊達の與作、其の子は私、こな様の腹から出た與之助はわしじやわいの父様は殿様のお氣にちがふて、國をお出でなされたは、小さい時で覺えねど、沓掛の乳母が話には、詞 母様も離別とやらで、殿様に御奉公、こなたは乳母が養育し、父さんに逢はせたら思へ共、甲斐もない、母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、重の井さまと尋ねよと懇ろにしへて乳母はおれが五つの年、久しう痰を患ふて鳥羽の祭の餅が咽につまつたやら、つひ死んでのけました

詞 乳母の子の一平は父様を尋ねに行き、在所の衆が養ふて漸々馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする、コレ守袋を見やしやんせ、何んの嘘を申しませう、お前の子に紛れない外に望みは何にもない、父様を尋ね出し一日なりとも三人一緒に居て下され見事沓も打ちます、此草鞋もわしが作つた、晝は馬を追ふて、夜は沓打、草鞋、つくり、父様母様養ひませう、父様と一緒に居て下され拜みまする母様と、取つき抱きつき泣き居たり。お乳ははつと氣も亂れ見れば見る程我子の與之助、守り袋も覺えあり、飛び付いて懐に抱き入れたく氣はせけども、アツア大事の御奉公、養ひ君のお名の瑾、偽はつて叱らふか、イヤ可愛げにさうもなるまい、マアちつと抱きたい、ア、どうせうと百千色

の憂涙、二つの目にはたもちかね、むせび沈みて居たりしが、いや／＼我子ながらもさかしい者、偽つても眞とせず母を心のきたない者と蔑しまるゝも情なし譯を語つて合點させ恥しめてかへさんものと涙拭ふて氣をしづめ、爰へ來い興之助と引寄せて兩手を取り、詞扱も大きうなりやつたの、とても成人せうならば侍らしうなせ尋常にも育たぬぞ、顔の道具手足まで母はかうは産み付けぬ美しい黒髪を此やうに剃りさげて、手足は山のこけ猿じや、ほんに氏より育ちぞと、又さめん／＼と泣きけるが詞コレ物をよう合點しや、腹から産んだは産んだれども今では子でも母でもない、淺ましく成下つたを、嫌ふていふではさら／＼ない、爰の譯をよう聞きや、詞母はもと御前様の御奉公人與作殿は奥家老のお子息

たがひに若木の戀風に、すれつもつれつ、一夜が二夜と度重なり、そなたを懐胎此の事御上へ聞へては、父も母も御成敗にあふ故に、詞病氣と偽り乳母が所で産落し、育て貰ふ其中に、情なや八平次といふ者の所爲にて父様は御追放、此母の情氣から不義の事あらはれ既に御成敗に極りしを、わしが爲には父様、そなたの爲には祖父様の定之進様、勿體ないわしにかはつての御切腹、お姫様の乳ばなれといひ立て此のお家敷へ奉公、世が世なれば奥家老の御子息、二番と下座にさがらぬ人、其時母も一緒に退けば、もつとも夫婦の道は立てども、目に餘つたお家の御恩、誰何時の世に報ぜん、残つて恩を報じてくれと、父様の斷り故、第一は男のため、夫婦の義理を忠義にかへて、飽かぬ離別をしたわいの、詞男

の子は幼うても、御勘氣の末氣づかひな、與作が子とばしいやんなや、サア早う御門へ出や、いかなる因果な産れ性、現在我子に馬追させ、男の行衛も知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乗つたとて、是が何になることと聲を忍びて泣くばかり、子は生れつき賢くて、聞きわけある程猶泣入り悲しい話を聞きました。さりながら常に乳母が申したは、乳兄弟の事なれば、母様にさへ逢ふたらば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされてくだされかしと、いへばちやつと口をおさへ。アレ／＼勿體ない、詞其乳兄弟は言はぬ事、姫君様の關東へ養子嫁子にお下り、高いもひくいも姫ごぜは大事の物先は他人の世間體、三吉といふ馬追が、乳兄弟に有るなどゝ、どう妨げにならうやら蟻

の穴から堤も崩る、軽いやうでも重い事もそ〜いふて人も聞く、先づ早う出てくれと、泣く〜いへば三吉。詞ア、母様あんまり遠慮過ぎました、先づ言ふて見て下され、また言をるか聞分ない、夫の事我子の事母に如才があるものか、合點のわるい聞分けないと制する中に奥よりも詞お乳の人、どこにぞい前から召しますと呼ばれば、アレ聞きや、人がくる出てたもと手を取つて引出だす不憫や三吉しく〜涙頬冠りして目をかくし、杳見まつべて腰につけ、見すばらしげな後影コリヤま一度こちらむきや、山川で怪我しやんな雨風雪ふり夜道には腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで、煩らはぬ様にしてたも、毒な物はらずに腹癩疹の用心しや、可愛の形やいた〜しや、千三百石の代取が、何の

罰ぞ咎めぞと、式臺の段階子に身を投げ伏して歎きしが懐中の有合ふ一步十三、巾紗に包み是嗜みに持つて居やと、涙ながらに渡さるゝ。三吉見かへり恨しげに母でも子でもないならば病うと死なうと要らぬお構ひ其一步もいらぬ馬方こそすれ伊達の與作が惣領じゃ母でもない、他人に金貰ふ筈がないエ、胴慾な母様覺えて居さつしやれと、わつと泣き出す其有様、母は魂消えいりて、養君、お家の御恩思はずばさて一人子を手放して何のやらうぞ、奉公の身の淺ましやと、もだえ焦れて歎きける、時に奥口ざゝめいて、早御立と姫君の、御輿かき上げ行列立ち、お乳の人の乗物を、ひら付にこそかき寄せけれ、お乳はさあらぬ顔付して、姫君のお伽に、最前の馬士を此の乗物に引つけ、お慰みにうたはしや。

畏つたと宰領ども。詞コリヤそこな自然薯め諷ひおらうとぎごつなく、詞ヤアこいつはほへをるか、何じやこりやいま〜しいと、握拳二つ三つ、いたゞきながら泣聲に、坂は照る〜鈴鹿はくもる、間の土山雨が降る、降る雨よりも親子の涙、中にしぐるる雨やどり。





釣女

た汝も知る如く此年迄定まる妻がな

い承れば西の宮の恵比壽三郎殿は福

者と申事はへ参り妻を申受けうと存

ずるが何んとあるぞ汝供をせい太郎

へ誠に仰せの如くでござる西の宮の

木びす三郎殿へ参るがよぶござりま

せう私も定まる妻がござりませぬ

次手ながら申受ませう大名へ扱へ

己はそつじな事をいふものじやゑび

す三郎殿とこそいへきびす三郎と申

事があるものではない太郎へハテ繪

にかいた折はゑびす三郎と申す木で

造つた折は木びす三郎と申す大

名へなうへ汝は物知りでおじやる

某は道不案内じや程に名所舊蹟を

語り聞せよ太郎へ長つてござる大名

へ去らば急いで参まうサアへ来い

へ太郎へ参りますへイヤなう

へ小唄に諷ふ奈良法師行も戻るも心

女

醜	美	大	太	醜	美	大	太
郎			郎	郎			郎
冠			冠	冠			冠
者			者	者			者
名			名	名			名
女			女	女			女
女			女	女			女

人形

豊豊豊鶴鶴鶴鶴鶴竹豊竹竹竹豊豊竹  
 澤澤澤澤澤澤本竹竹本本竹竹本  
 仙龍仙友友叶寛伊呂常さ播千富源  
 十太太衛治太達太太子の路駒太太  
 松市作郎郎門郎夫夫夫夫夫夫夫夫

(床本) 釣女

女

抑是は猿樂の昔よりして其業の可笑といひし狂言師名に大藏や鶯流の容を寫す釣女大名かやうに候

者は此所の大名でござる。ヤイへ太郎冠者あるか太郎へハア大名有るか太郎へハア御まへに大名居るか太郎へハア大名へねんのう早かつ

か太郎へハア大名へねんのう早かつ

か太郎へハア大名へねんのう早かつ

か太郎へハア大名へねんのう早かつ

のとまるも山崎の〜女郎と淫弊の  
 長枕結ぶ縁しの尼が崎 大名  
 〽アハ、  
 、ヤ面白い〜シテ向ふに見ゆる  
 山は何山じや 太郎 〽ハテあれは山で  
 ござる 大名 〽愛な申か山は山じやが  
 何と申 太郎 〽ハ、ア何山はエ、山で  
 ござるヲ、それ〜 〽あんの山から  
 こんの山へ飛で出たるは何者ぞ頭に  
 ぶつふと二ツ細ふて長ふてりんとは  
 ねたをちゆつとすいた 太郎 〽兎じ  
 や 大名 〽何を申ぞシテ西の宮はまだ  
 か 太郎 〽最早此森の内でござります  
 る 大名 〽去らば參詣を致そうてうず  
 〽 太郎 〽ハア 大名 〽先鰐口に取り  
 つかふぢやぐわん〜 〽いかに申上候  
 〽我此年迄無妻なり 大名 〽三郎殿の  
 利益にて定まる妻をさづけたまへ〜  
 授けたまへと一心こめて伏拜む 大名  
 〽ヤイ太郎冠者汝もおがめ 太郎 〽畏  
 つてござるぢやぐわん〜 〽いかに木  
 比壽三郎殿へ申候 〽我も定まる妻は  
 なし似合相應美しき妻をお授け〜  
 と三拜九拜したりける 大名 〽ヤイ太  
 郎冠者今宵は通夜をせう汝もまどろ  
 め 太郎 〽畏つてござる 大名 〽アラと  
 うとや〜 〽内陣の内ぞゆかしき我  
 妻を千代と契らん手枕の袖を覆ふて  
 まどろみしがほどもあらせず夢さめ  
 て 大名 〽ヤイ〜 お告があつた〜  
 汝が妻になる者は西の門の一の階に  
 あらう程に連て歸れとお告が 太郎  
 〽 〽はいかな事私がお告も其通り 大名  
 〽いそいで參らう〜 太郎 〽參りま  
 す〜 〽勇み悦ぶ足元に落たる竿を  
 取上て 大名 〽ヤこれはいかな事妻で  
 はなふて竹の先に糸が附てあるこれ  
 はなんであらうぞ 太郎 〽ハアふしぎ  
 なお告でござりますすな 大名 〽イヤ是  
 はさつた惠比壽殿はふだん釣竿を  
 放さず釣斗りしてござるによつて此  
 針で妻をつれといふ事であらう、先  
 急ひで釣ませうエイ〜 〽釣るよ  
 〽 〽神の教への釣針をおろしめよ  
 き妻をつらうよ〜 〽合 〽針をおろせ  
 ば合 〽針をおろせば 大名 〽ヤイ〜  
 太郎冠者かゝつたわ〜 太郎 〽何か  
 かりましたか 大名 〽逆も〜 おも  
 い 〽女ぢやチャット来て腰を取れ 太郎  
 〽 〽心得ました 大名 〽ハアテそれがしで  
 はないお妻さんの腰を取れ 太郎 〽心  
 得てござるふしぎやな氣高き女を釣  
 上て 大名 〽アラ有難や扱も能い妻が  
 かゝつてござるうれしや 太郎 〽何が  
 扱お悦びでござる 大名 〽これ〜 そ  
 なたは定まる妻じやによつて目を掛  
 てやる程に夫を大事にしませうぞヤ  
 小野の小町か楊貴妃かアラ美しや〜  
 太郎 〽イヤゆく道々こつそり樂まう  
 と春中へ入て來た此吸筒お二人さま  
 の三々九度はにて目出たう御祝言、



大名 〓ヤこれは一段の事じや、サア  
 〓つげ 太郎 〓心得てござる 大  
 名 〓先女子の方よりさしませい 太郎  
 〓心得ました女 〓申我夫必ず見す  
 て、下さるな 大名 〓なんの見すて、  
 よひものか女 〓ヲ、嬉し 大名 〓太郎  
 冠者祝して一ツうたふてくれ 太郎 〓  
 畏つて候 〓高砂や此 盃が二世  
 の縁神の御前で祝言は三郎さまがお  
 媒人よしそれとても浮氣心が有なら  
 ほんに罰が當るであろぞいな必ず見  
 捨て下さるな、やいの 〓と寄添ば  
 〓傍に閉居る太郎冠者氣をのみあせ  
 り 太郎 〓ヤ申 〓其釣竿を私にお貸  
 下され見事釣て見せませう 大名 〓早  
 ふつれ 〓 太郎 〓イヤ釣る段ではご  
 ざらぬまづお二人様はそれにて御見  
 物下さりませマツ 〓 〓 〓 エイ  
 〓 〓釣るよ 〓釣る物は何々鯛に  
 鯉に恵方棚に撞鎖信田の森の狐にあ

らぬ釣針をさげておろして二十二相  
 揃ふた十七八を釣ろうよおかつさん  
 をつろうよ 〓餘念もながき鼻の下、  
 〓、當るぞ 〓どつこいメたと引上  
 りれば被衣目深にかつぎし女アラとう  
 とや掛つたい 〓サア 〓こちらへ  
 ござれ嬉しや 〓 〓サア 〓是から  
 は三々九度の 盃じやこれへござれ  
 何も恥しい事はないそなたと夫婦に  
 なるならば春は花見夏は涼み秋は月  
 見の酒盛に冬は雪見のちん 〓鴨天  
 にあらば比翼の鳥地に又あらば連理  
 の枝かならずそもじはかはるまいな  
 悪女 〓なんの變つてよいものかな 大  
 名 〓サテもよい妻を釣た物かなヤイ  
 〓 〓太郎冠者此兩人のお妻様に汝が  
 國の舟歌を歌つて聞かしてやれ 太郎  
 〓畏まつてござる 大名 〓次手に手振  
 りもして見せい 太郎 〓ヤア心得まし  
 た、沖で峰見りや三上の櫻とサ、枝

をこんきりこつと、どうらんに付て  
 忍び殿様にぶらゝんと提げさせぶか  
 いな、花のようにたサモ風俗はよう  
 そろ、そつとせいなびかんせ 大名 〓  
 サテ 〓面白い事ぢやヤイ 〓 〓 太郎  
 冠者汝が妻も被衣を取らしませ 太郎  
 〓なにがさて餘りの嬉しさに顔を見  
 る事を忘れておりました、サラバ一  
 寸と御面像を 〓被衣をとればこはい  
 かに鯉に等しき醜女ゆゑ 太郎 〓ヤア  
 ワゴリヨは鬼か化物かなう消てなく  
 なれ 〓 悪女 〓なう 〓我夫今おつ  
 しやつた楽しみは嬉しふて 〓わた  
 しや忘れはせぬわいなア 太郎 〓ヤレ  
 情ないゆるいてくれ 〓 〓 悪女 〓そり  
 やつれなひぞへ 太郎冠者どの 〓コレ  
 こつちら向んせエ、何じやいなア 〓  
 思へば深い戀の淵しづむ我身を釣糸  
 に結んだ縁の西の宮蛭子まうけて二  
 世三世かはらぬ色は棹竹の末葉榮ゆ

く夫婦中放れはせじと取ずる 太郎  
 へなう恐ろしや〜 大名 へヤイ太郎  
 冠者三郎殿の授たまひし妻じやによ  
 つて否應はなるまいぞ 太郎 へア、そ  
 なた様は能い月日の下でお産れ相成  
 た此太郎冠者は月も日もなく黒闇で  
 うまれたと見へます 大名 へ何は兎も  
 あれ目出たふ舞ふではないか 太郎 へ  
 勝手にさつしやれ 大名 へ高砂や此浦  
 船に帆をあげて へ月諸共に舞の袖 へ  
 女蝶男蝶の中もよく遠く鳴尾の沖の  
 石堅い契りは住吉の千代に八千代を  
 かけはしや千秋萬歳の千箱の玉を  
 奉る目出たさよ 大名 へ目出たいな  
 太郎 へ へんお目出たふござります 大  
 名 へ某しが妻は何處へ参つたアレ  
 へ へ 太郎冠者が身共の妻を連れて行  
 きをる、アノこゝな、おうちやく者  
 醜女 へナニ太郎冠者が美くしい女を  
 連れて居たとナへ、腹立やくいさい

てやる〜 大名 へあのこゝなおうち  
 やく者やるまいぞ〜 醜女 へくいさ  
 いてやる 大名 へやるまいぞ〜 醜女  
 へくいさいてやる。



## 新 興 演 藝 部 第 二 回 興 行

七月十一日初日

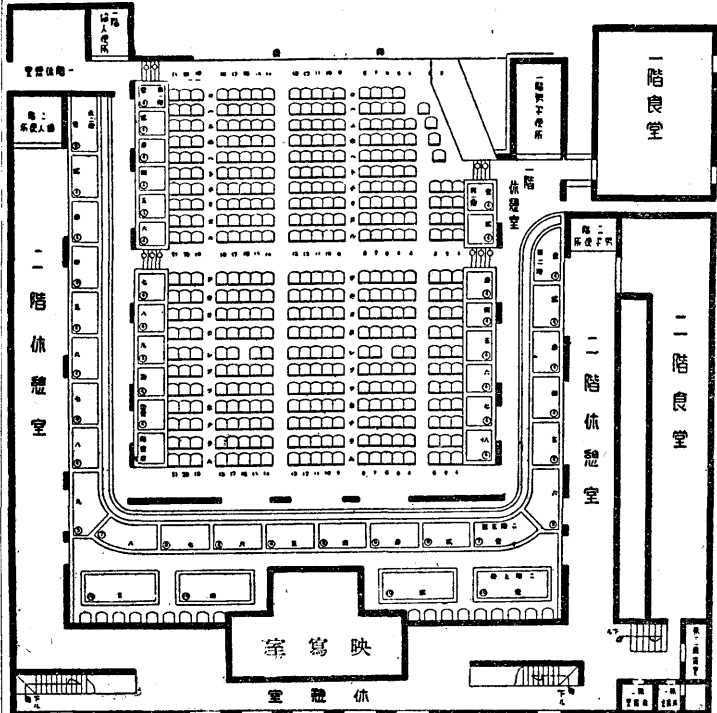
毎日正午より開演

日曜は十時開演

日本演藝界の王座を目指  
 す新興演藝部の第二回進  
 出！新人揃ひのスケイメ  
 ンバーで抱腹絶倒ムチャ  
 クチャに笑はず底抜けの  
 面白さ、どこまで脱線す  
 るやらこれこそ奇想天外  
 の爆笑笑殺部隊！！

どうとんぼり  
**角座**

# 内案御席場御座樂文



御・觀・覽・席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前・賣・切・符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝに好きな處が御自由にとれます御用命の節お呼出しの電話は  
南四七壹番で御座ります

切・符・賣・場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります  
二・等・席・三・等・席切符は當日正  
二・等・席・三・等・席切符は當日正  
二・等・席・三・等・席切符は當日正  
二・等・席・三・等・席切符は當日正

觀賞おほえ

昭和十四年七月 日

かさね  
與右衛門 色彩間苳豆

一谷嫩軍記

双蝶々曲輪日記

戀女房染分手綱

釣

女

# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形淨瑠璃は 常に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず

我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来まますやう、皆様の御期待に反かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尚御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御換帯品は 正面一階に御預り所が御座います。お帽子は椅子の下

に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますから成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ます。

賣店 は 二階東側と一階西側休憩所に御座居ます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座居ます。

場内にて 寫眞撮影は廻對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座居ます

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを付けて居りますから御用の節は御中附け下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

## ◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として  
案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じよろづ、御案内申上げること致しました。御一報次第登上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑩ 三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十四年七月七日印刷  
昭和十四年七月八日發行

大坂市南區久左衛門町八番地  
發行所 松竹株式會社大阪支店

大坂市南區久左衛門町八番地  
松竹株式會社大阪支店內  
獨體發行所 鳥江鏡也

大坂市西區土佐通一丁目十二番地  
印刷所 永井日英堂印刷所 金二十錢

母	母	母	母	母
四	三	三	三	三
三	三	三	三	三
二	三	三	三	三
一	〇	一	一	一
七				

電話南(75)

# 南二溜良料理

大坂四心稿

御家族連にも  
御宴會にも

堂食一南座楽文

賜命下御に前幕一は用御の事食御  
才まい座御で利便御極至は丸は